コミュニケーションでつなぐ防災の輪

日本医科大学 救急医学 教授　**布施 明**

顔が見える関係で連携を強化

災害拠点病院は、阪神淡路大震災の時の教訓から厚生労働省が『災害時における初期救急医療体制の充実強化について』（平成８年５月 10 日健政発第 451 号健康政策局長通知）を発令し整備されてきた。東京都は 12 の二次保健医療圏（島しょ保健医療圏除く）に分けられ、付属病院は区中央部（文京区、千代田区、中央区、港区、台東区）の災害拠点病院に指定されている（図２）。

「付属病院は、災害拠点病院の中でも区中央部の『地域災害拠点中核病院』となっています。災害時には、指揮本部として区中央部の災害拠点病院を取りまとめ、有機的に機能させる役割を担っています。平時は、災害拠点病院や基礎自治体と共同訓練や連携会議を行い、ルールや供覧できる資料を作成しています。普段から“顔が見える関係”を築くことが大切ですね」と救急医学の布施明教授は語る。

訓練から見つかる課題

訓練は、実際に体を動かし避難や災害医療活動などを行う『実地訓練』と地図を用いたロールプレイング方式の『図上訓練』がある。「平時の訓練によって、災害拠点病院や基礎自治体で課題を確認・共有することは重要です。様々な想定をしていなければ有事の際、各所の動きが機能しません」。区中央部特有の課題は、大きく分けて３つあるという。

①昼夜人口の差

区中央部は、オフィス街が多く昼夜の人口に大きな差がある。日中に発災した場合、多くの帰宅困難者が発生するが、自治体や各事業所での受け入れ体制・食料・水などには限りがある。「都の条例では発災後 72 時間は救命救急活動が優先されますが、帰宅困難者が道にあふれた場合、活動に支障をきたします。帰宅困難者を溢れさせないための施策など、更なる検討が必要です」。また、夜間の場合は、交通機関がマヒした際、医療従事者が医療機関に駆け付けられない可能性もある。そのため発災時間を昼夜分けたシミュレーションが必要になる。

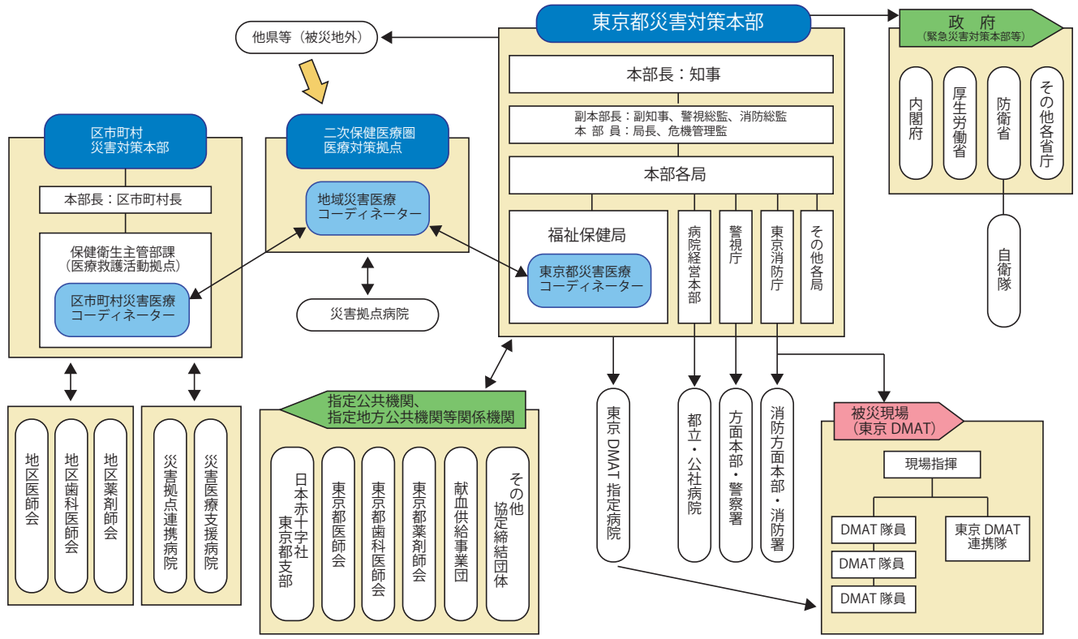
②中央官庁の集中

中央官庁が集中しているエリアに対し、どの様に医療を配備するか検討が必要。

③高層ビル、地下街が多い

高層ビルにおいては、エレベーターの作動状況が大きく影響を及ぼす。エレベーター内の閉じ込めや傷病人搬送、高齢者の生活など様々な問題が切迫した課題としてあがる。

（図２）二次保健医療圏（島しょ保健医療圏除く）



（図３）発災直後から急性期までの連携体制（出典：東京都福祉保健局「災害時医療救護活動ガイドライン」）

災害医療マネジメントのスペシャリスト

東日本大震災以降、東京都は大きく防災計画を見直し、災害医療時に重要な業務を行う『災害医療コーディネーター』という制度を策定した（図３）。

①東京都災害医療コーディネーター
　東京都災害対策本部　３名
②地域災害医療コーディネーター
　二次保健医療圏の 12 エリア　12 名
③区市町村災害医療コーディネーター
　区市町村ごと　１～複数名

布施教授はこの『地域災害医療コーディネーター』に任命されている。「私の役割は、東京都災害医療コーディネーターとの連絡調整はもちろんのこと、災害時に二次保健医療圏内の医療情報を集約・一元化し、医療資源の配分、収容先医療機関の確保等の医療救護活動等を調整することです。平時から地域の災害医療連携に対する医学的な助言や関係機関との連携体制構築を行っています」。

東京都主催災害図上訓練

日本初！ IMAT 協定締結

IMAT（事件現場医療派遣チーム：Incident Medical Assistance Team）とは、ハイジャックや凶器を使用した人質立てこもり事件に際し、被害者・容疑者・警察官などが負傷する恐れがある場合、警察からの要請で出場する医療チームである。2012 年に全国で初めて本学付属病院が警視庁と協定を結んだ。これにより警視庁と医療機関の情報共有が可能になり、事件発生時の救命率の向上が図れると同時に、派遣された医療チームの安全面の確保に繋がった。また、全国で２例目の IMAT 協定は、千葉北総病院と千葉県警が 2016 年に結んだものである。

「現在、首相官邸のホームページにおいて、国際組織犯罪等・国際テロ対策推進本部による『2020 年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会等を見据えたテロ対策推進要綱』の中で、IMAT の協定締結医療機関の拡大及び合同訓練の推進が掲げられています。このように IMAT が全国的に広がりを見せています」。

日本医大同窓生による全国ネットワーク

「災害時は人との繋がりがなければ、どんなに最新の機器やシステムがあっても役に立ちません。平時から“顔が見える関係”をどれだけ築けているかで、災害時の対応力も変わってきます。本学同窓会の先生方のネットワーク・絆の強さは災害医療において、大変心強いものです。今後も同窓の先生方や地域の医療機関の方々との交流を大切にし、万が一に備えた準備を進めてまいります」。